

編 集 後 記

教授になり、病院長になって、改めて論文執筆の大切さを感じています。医者は患者にわかりやすく病態・病状を説明する義務があります。最新の文献情報を蓄えて、様々なタイプの患者さん・ご家族に対して、それぞれにマッチした話し方を工夫する必要があります。英文論文執筆は特に大学病院勤めの場合は、必須の事項と思いますが、日本語で書くことも重要です。「臨床神経学」のようなハイレベルの雑誌でレフリーと議論することはとても大切なことで、そのことで国語力も医学・医療力さらに人間力までが鍛えられるのです。

論文執筆は、勿論医学・医療の進歩のためでもあります。目の前の受け持ち患者さんのためにもなるのです。あまり構えずに、この人とご家族のために、書いてみよう、と思ってください。きっと書けます。私は元々遅筆でしたが、このことに気付いた時から、少し早く書けるようになりました。

次に、最近受けた病院機能評価の際に、病院長の立場で、最初に述べたことを再掲します。論文執筆も病院運営も患者さんが中心である、という点では同じです。巨視的にみれば、病院運営の知恵も論文執筆のための知恵も共通のことが多いので、きっと皆さまにも参考になると思います。

『私が勤めている病院の、今年度の課題と、それに対する取り組みは、一つは病院運営の安定、もう一つは医療安全文化の醸成です。病院運営安定のためには、様々な方策

が考えられますが、なんといっても地域医療機関との連携強化が重要で、その為には、紹介・逆紹介患者の増加を図ることが重要になります。

上半期の「紹介件数」は昨年度とあまり変化なく推移しておりますが、「逆紹介件数」は今年度かなりアップいたしております。下半期には、これらがさらに上昇するように努力したいと思います。

さらに、入院患者増加を図りたいと思っております。このためには、ベッドコントロール機能を強化して、下半期に例年以上の好成績を期しているところです。

次に、医療安全の徹底です。これについては、医療安全文化の醸成を目指したいと願っております。しかし、これは文化ですから一朝一夕（いっちょういっせき）に獲得できるものではありませんが例えば「挨拶の励行」、「思いやりの実行」などですが、それらを踏まえて、さらに、深みを加えたいと思います。

その為にも、本日の皆様のご指導を期待いたします。

私は病院長3期目で、今年は8年目になります。また、今年度から診療科長・教授は退任いたしまして、病院長専属となりましたので、病院運営のために従来以上時間をとれる立場でもございます。

昨年以上のご指導を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。』

(河村 満)

〈編 集 委 員〉

編集委員長 鈴木 則宏 編集副委員長 河村 満
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡
 瀧山 嘉久 西野 一三 野村 恭一 星野 晴彦
 編集委員(幹事兼任) 園生 雅弘 高尾 昌樹 森 秀生

「臨床神経学」 第55巻 第12号 平成27年12月1日発行
 編 集 者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発 行 者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 高 橋 良 輔
 印 刷 所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日 本 神 經 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>